

## 喫煙者の肩身狭く

写真は名古屋市立女子短大に就職して、3年ほど経った頃だ。まだ若かった。体育館前の芝生で、なんと！たばこを吹かしているのではないか。「たばこ話」はあとに回して、体育館の話から始めたい。

この体育館で球技大会などの「イベント」が行われた。「教職員チーム」も参加することになっており、毎回、必ず参加した。写真下は大縄跳びシーン。飛び上がって、足を縄に引っ掛けているのが私。なんとも「どんくさい」。この写真をわが記念すべき「最終講義」で披露したら、大喝さいであった。さらに記憶に残るのが、バスケットボール部の顧問として、練習や試合に立ち合ったことだ。前任者を引き継いだのだが、バスケのルールも知らない私であったが、選手たちに教えてもらい、なんとか顧問をつとめた。これも女子短大での懐かしき思い出である。



さて、喫煙に話を戻そう。今から考えると想像もつきにくいですが、たばこを吸っていた。1日1箱だったと思うが、とにかく吸っていた。これが「証拠写真」だ。当時、たばこを吸っている同僚は多かった。教授会の部屋が煙で霞んでいたこともあった。たばこを稼ぐため、同僚と今池のパチンコ店にも行った。その同僚が1年前に亡くなったことを知り、あまりのことに衝撃をうけた。短大の教員生活半ばのころ、思い切って禁煙することにした。入院していた知人のお見舞いに行ったとき、病室の近くの「喫煙コーナー」で患者さんらが、たばこを吸っている姿を見て、禁煙することに決めた。それから一度も吸っていない。煙で霞むパチンコ店に入ることも躊躇する。

最近、標題の日経新聞4月24日の夕刊を読み、わが「喫煙時代」を思い起こした。平成の30年で最も肩身の狭くなったのは喫煙者かもしれない。職場や街中でプカプカと煙を吐き出していた姿は完全に過去のもの。低タール化や加熱式たばこの登場でも喫煙人口の減少は止まらず、令和の時代にはさらなる縮小が避けられない。

国内のたばこ販売量は96年がピーク。日本たばこ協会によると、同年の販売本数は3483億本だった。JTが調べた喫煙率は、男性の8割が吸っていた60年代の40%台からは後退したが、なお35%あった。しかし、包囲網は狭まっていく。未成年者の喫煙問題を受け、この年から屋外のたばこ自動販売機が深夜に稼働停止。2002年に東京都千代田区が全国初の路上喫煙禁止条例を施行し、各地の自治体が追随した。自販機でたばこを買うには08年以降、成人識別カード「タスポ」が必要になった。

18年のたばこ販売数は1327億本でピークの4割以下に。喫煙率は18%まで下がった。

(2019年5月8日)